

# アンリ・ジル＝マルシェックスの日本における音楽活動と音楽界への影響 —— 1925年の日本滞在をもとに ——

Henri Gil-Marchex's musical activities in Japan,  
his influence in the 1920's and beyond

白石 朝子

SHIRAISHI Asako

The French pianist, Henri Gil-Marchex, concertized throughout Europe in the first half of the Twentieth century. His travels also included a total of four visits to Japan in 1925, 1931 and 1937, where he performed and lectured. In 1925, Gil-Marchex gave 22 concerts in Japan in three months. The range of his programs included keyboard pieces from the Baroque through to the most contemporary music of that time. In the 1920's and 1930's, Japan's rapid cultural and artistic development was heavily influenced by Germany. Predictably, Gil-Marchex's 1925 concert series and lectures created a shock-wave throughout the traditional-laden Japan that reverberated throughout the entire artistic community and made an indelible mark. My research will focus on Henri Gil-Marchex's tumultuous first visit in 1925 and provide an analysis of his influence on Japan's music and culture.

キーワード：Henri Gil-Marchex, 外来演奏家 Visiting Performer,  
西洋音楽受容 Reception of Western Music

## 0. はじめに

アンリ・ジル＝マルシェックス (Henri Gil-Marchex 1894-1970) は、ディエメ (Louis Diémer 1843-1919)、コルトー (Alfred Denis Cortot 1877-1962) に師事し、パリ音楽院を首席で卒業後ヨーロッパを中心に活躍したフランス人ピアニスト<sup>1</sup>で、日本には、1925、31 (2回)、37年に計4回訪れており、全国各地で演奏会やレクチャーコンサートを行った<sup>2</sup>。また滞在中には日本音楽を研

1 アンリ・ジル＝マルシェックスの経歴を紹介しているものとして『音楽大事典』平凡社、1982年と『演奏家大事典』財団法人音楽鑑賞教育振興会、1982年が挙げられる。二冊ともジル＝マルシェと表記されているが、本論文では来日当時の表記や先行研究を優先した。また、それらによると27～30年エコールノルマルで教鞭をとり、53年ボワティエ音楽院長。前者には《Les nuits de Tokyo》《Sept chansons de geishas》という自作曲も掲載されている。

2 現在調査中であり、仙台、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸、福岡の各地で演奏会を催し、旧帝国大学や早稲田大学、慶応大学などで講演を行っていることが分かっている。

究し、フランスの音楽雑誌に論文を載せて日本音楽を紹介したばかりでなく<sup>3</sup>、作曲家としても《古い日本の二つの映像Deux Images du Vieux Japon》を残している。

これまで、日本における西洋音楽受容の研究において、ジル＝マルシェックスがドイツ音楽偏重であった日本の音楽界に対し、近現代の作品を含んだプログラムを演奏したことは広く知られている<sup>4</sup>。また、彼の来日に力を注いだ薩摩治郎八の遺品の調査によって、ジル＝マルシェックスとの交流が紹介され、演奏会の詳細についても明らかになりつつある<sup>5</sup>。しかし、当時出版されていた資料の徹底した調査・分析を基にした音楽活動の全貌解明やプログラム内容の検討、当時の日本の音楽界に与えた影響など、彼の音楽活動自体を深く掘り下げて考察し、日本の音楽界との関係を明らかにした研究は行われていない。

そこで、本研究では、当時発行されていた音楽雑誌計4誌（音楽と蓄音機、音楽評論、音楽新潮、月刊楽譜）と新聞計17紙（東京朝日新聞、東京日日新聞、東京讀賣新聞、報知新聞、都新聞、時事新報、横浜毎朝新報、横浜貿易新報、京都日日新聞、京都日出新聞、朝日新聞京都版、大阪朝日新聞、大阪毎日新聞、大阪時事新報、神戸新聞、*The Japan Times*、*The Japan Advertiser*）、さらに彼の日本における音楽活動を伝えたフランスの新聞記事（*des débats*、*Paris-Midi*）と彼の活動に関わった日仏会館が大正14年より年度末に発行した『財団法人日佛會館報告書』を調査し、ジル＝マルシェックスが日本の音楽界に対してどのような働きかけをしたのかを明らかにするとともに、日本の音楽界が示した反響や与えられた影響について考察することを目的とした。

## 1. 来日への期待 ー来日を採り上げた新聞記事と雑誌記事ー

ジル＝マルシェックスは日本においてどのように迎えられたのだろうか。前述の先行研究により、薩摩治郎八が彼の来日に尽力した事は周知の事実である<sup>6</sup>。

1925年3月17日付*The Japan Times*「昨晚帝国ホテルで、薩摩治郎八が今秋日本を訪れるすばらしい若手ピアニスト、アンリ・ジル＝マルシェックスの来日を期待し、音楽関係者に夕食をふるまった」という報道からも明らかのように<sup>7</sup>、おそらく彼の働きかけによって、同年3月には既に新聞社4社が写真入りの記事を載せ、音楽新潮が5月号から10月号に亘り詳しい記事を掲載した。前者は、ジル＝マルシェックスの来日予定と彼の簡単な経歴を伝え、後者は、薩摩治郎八、大

3 Richard A.Watson,William Lichtenwager,Virginia Hitchcock Hermann and Horace I Poleman" Bibliography of Asiatic Musics,Tenth Installment"Note,Second Series,Vol.7,No.2 (1950) には、アンリ・ジル＝マルシェックスによる日本に関する論文4本が紹介されている。

4 例えば、船山隆「ラヴェルと私たちの時代ーその「現代性」と「新しさ」と」『音楽芸術』音楽の友社、1975年6月、堀成之「日本ピアノ文化史-14-ジル＝マルシェックスの来日（フランス・ピアノズムの紹介）」『音楽の世界』日本音楽舞踊会議、1984年12月や笠羽映子「日本とラヴェルー日本と西洋音楽をめぐる一考察」『比較文学年誌』早稲田大学比較文学研究所、1988年、佐野に美「ドビュッシーに魅せられた日本人 フランス印象派音楽と近代日本」昭和堂、2010年が挙げられる。

5 例えば、神吉恵美「ジル＝マルシェックスのピアノ演奏会」『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』共同通信社、1998年、小林茂「1925年の器楽的幻覚-アンリ・ジル＝マルシェックスの演奏旅行と梶井基次郎」『比較文学年誌』早稲田大学比較文学研究室、2005年、同「アンリ・ジルマルシェックスの演奏会詳細追補」『比較文学年誌』早稲田大学比較文学研究室、2008年、同「薩摩治郎八」ミネルヴァ書房、2010年が挙げられる。

6 大正14年度『財団法人日佛會館第二回報告』にも「美術音楽ニ於テハ佛國ニ學ハサル可カラサルモノ少ナカラサルニ、從來本邦ニ於ヒテハ佛國の音楽ヲ閑却シ居リタルノ感アリ。會々佛國ピアノ名手ジルマル、セックス氏、薩摩治郎八氏ノ招キニ慶シテ来朝」との報告が寄せられている。

7 小林茂（2010）には、薩摩治郎八が駐日フランス大使ポール・クロードル宛の招待状を送ったこと、それに対してクロードルの代理大使ジャンティは、大使館付武官ルノンドーおよび第一通訳官ボンマルシャンとともに、三月一六日晩餐へのご招待に喜んで同うと、三月四日付で返事を出したことが報告されている。晩餐会が開かれた場所については「薩摩邸」ではなく、帝国ホテルであったと推測される。

田黒元雄、小松耕輔、柿沼太郎の4人が、それぞれ演奏会開催の趣旨や彼の詳しい経歴、プログラムの内容を紹介している。

初めてアンリ・ジル＝マルシェックスの名前を日本に紹介した3月9日付讀賣新聞は、彼が「フランス音楽の精華を日本に紹介し且つ我が國固有の音楽を研究して彼の國に傳へるためフランス政府と東京フランス大使館デアンチー代理大使<sup>8</sup>と打合せの結果この重い任命を帯びてはるぐ来朝」するため、「純藝術的の立場から興行的演奏はやらぬ」という薩摩の談話と「将来作曲の希望もあるので日本演劇、能狂言も見たい」というジル＝マルシェックスの言葉を掲載した<sup>9</sup>。それらは、この演奏会が単なる営利目的ではなく、日仏の文化交流を目的として行われるという前例のない特殊性を浮かび上がらせると同時に、その後の彼の音楽活動を予期させるものであったといえる。

そして、その2ヶ月後に、音楽新潮5月号に寄せた薩摩治郎八の6ページに亘る文章によってジル＝マルシェックスの詳しい実績が明らかになる<sup>10</sup>。また、6月号には大田黒元雄がロンドンで実際に彼の演奏するラヴェルの作品を聴いた記憶から、それは「鋭敏なる繊細な感覚に溢れてゐると同時に、熱情に富んだ演奏であつた」と語り、彼の実力に太鼓判を捺した。さらに「日本の好楽家は、今日まで想像の範囲を出なかつた現代の音楽について、始めて新しい智識と忘れがたい感銘とを得るであらう。」と演奏会に期待を寄せている。

次いで7月号において、帝国ホテルで行われる六夜の演奏会プログラムが明らかにされた<sup>11</sup>。また、このプログラムを「あのやうな曲目をしかも六回も続けて聴くといふ幸運は西洋にゐてさへ滅多に得られるものではない」と評した大田黒元雄が9月号において、演奏曲目中のフランク、ラヴェル、ドビュッシー、ファリャ、シマノフスキ、ロード・バーナーズ、グーセンスの作品について紹介している。

さらに、8月号と9月号には、ジル＝マルシェックスの論文「ラヴェルのピアノの技巧について」が小松耕輔の翻訳により掲載された。これは、*La Revue Musicale* 1925年5月号に掲載されたものであり、その僅か3ヶ月後に日本で紹介されたことは驚くべきことである<sup>12</sup>。論文には、《水の戯れ》や《高雅にして感傷的なワルツ》などラヴェルの作品を演奏する上で必要なテクニックが部分的に紹介され、「ペダルのヴィヴラートが定かなる響を空中に漂はす」という説明や「ピアニストたる者は、例へて云はゞ彼自身で配色した音調のパレットを持つて居ねばならぬ。その色調の變化が無数で、到底一々數へ上げ得ぬ程である」という記述に、彼の所有するテクニックと表現する音楽を垣間見ることができる。ラヴェルという名前さえ未だ広く浸透していなかった日本の音楽界において、この論文の内容がどれほど理解されたかは疑問であるが、ラヴェルとごく親しい演奏家による文章が紙面を飾り、10月にはその演奏家による演奏を聴くことが出来るという期待は、

8 Francois Gentil、前述の夕食会でGeorges Bonmarchandのスピーチを代弁している。Georges Bonmarchandについては『来日西洋人名事典』（日外アソシエーツ株式会社、1995年）454頁参照。

9 小林茂（2010）には、1925年5月号『婦人画報』に載せられた「今秋来朝する仏国の洋琴家 アンリー・ジル・マルシェツクス」と題する記事について紹介されている。「この記事が掲載されたことは、この段階で、大使館の協力が得られると確実になったことを意味している。」との記述は、3月に載せられた新聞記事においても既にいえるのではないだろうか。

10 同じ文章が『音楽と蓄音機』9月号にも掲載された。

11 このプログラムは第1日「唯神論者の音楽」第2日「自己表現の音楽」第3日「追想の音楽」第4日「描写的音楽」第5日「舞踊の音楽」第6日「現代音楽への捧げ物」と題され、実際の内容とは構成が異なっており、シマノフスキ、バーナーズの作品も含まれている。

12 *The musical Times*においてFred Rothwellnの英訳で紹介されたのが1926年12月である。

音楽愛好家の間でますます大きく膨らんだのではないだろうか。

そして、10月号の柿沼太郎による記事は「六回の獨奏會こそは眞に空前絶後の大偉觀だ。・・私達は氏の来朝に多大の感謝と期待を寄せると共に、氏の使命が有終の美を結ぶことにいさゝかの疑念をも持たない。」と締めくくり、10月10日に始まるジル＝マルシェックスの演奏会を迎えることとなる。

## 2. 帝国ホテルにおける六夜の演奏会 ―主観的・追想的・舞踊音楽演奏会―

ジル＝マルシェックスは、主観的音楽演奏会（10月10日、11日）追想的音楽演奏会（10月17日、24日）舞踊音楽演奏会（10月25日、11月1日）と題して帝国ホテルにおいて6回シリーズの演奏会を行った。演奏会のために作成されたプログラムは51ページにわたっており、マティスの描いたジル＝マルシェックスの肖像画が表紙を飾り<sup>13</sup>、演奏曲の解説が掲載され、マリー・ローランサンの描いたプーランクの肖像画など作曲家の肖像画や写真が添えられるという大変豪華なものであった。これには、前述の音楽新潮に掲載された薩摩と大田黒による紹介文と小松耕輔の訳によるジル＝マルシェックスの論文も載せられている。

そのプログラムによると、16世紀の作曲家フランシスク<sup>14</sup>やリュリ<sup>15</sup>、クーブラン、ラモー、バッハ、スカラッティを始めとしたバロック期の作曲家からモーツァルトとベートーヴェン、さらにショパン、シューマン、リストなどロマン派の作曲家、そしてドビュッシー、ラヴェル、ファリャ、アルベニス、ストラヴィンスキーなど近現代の作曲家、計35名による93の作品<sup>16</sup>が演奏されたことがわかる。また、この演奏によって世界初演1曲を含む50曲の日本初演が成し遂げられた<sup>17</sup>ことになり、この公演は歴史的な意義のある演奏会であったといえる。世界初演された《五時フォックス・トロット》は、ラヴェル作曲のオペラ《子供と魔法》<sup>18</sup>からの抜粋をジル＝マルシェックスが編曲した作品<sup>19</sup>であった。《子供と魔法》がパリで初演されたのは1926年1月であり一部分の編曲とはいえ、パリ市民よりも先に日本国民がその音楽を耳にしたことには大変驚かされる。

この演奏会に足を運んだ文化人は数多く、作曲家の松平頼則や清瀬保二、柴田南雄、また音楽評論家の野村光一、中島健蔵、小松耕輔、文学者の中野好夫や小説家の梶井基次郎などの著書に、その記憶が記されている。一方で、当時の報道としては、例えば1925年10月11日付都新聞の記事が挙げられ、「来場者は内外の外交官、斯道の専門家、好樂者等で近来稀にみる大演奏会」であり、ジル＝マルシェックスの演奏は「技巧と感覚に秀で、同情と熱情に富むとの評判は全くの事實で、演奏曲目の組合せの巧妙なると作曲者の精神と人格とを現さうと努めてゐる上に、いふにいはれぬ絃音の美しさは誰人も魅了せずにはおかなかつた」と記されている。

13 演奏会プログラムとマティスの肖像画は国立西洋美術館所蔵。

14 演奏された『オルフェの宝』はリュートの作品であるため、ピアノのために編曲されたと推測される。

15 演奏された『パサカイユ』は自身で編曲した楽譜を出版していたため、この作品である可能性が高い。

16 いくつかの小品で成り立っているものは、小品を一曲と数えている。

17 事実とは異なるが、プログラム表記に基づいて数えた。例えば、ドビュッシーの作品は大田黒元雄が既に演奏していたものも初演と記されている。

18 初演はモンテ・カルロ歌劇場にて1925年3月21日に行われている。

19 《FIVE O'CLOCK FOX-TROT fantaisie extradite de (L'enfant et les sortilèges) par Henri Gil-Marchex pour piano》実際のプログラムに編曲との表記はないが、『音楽新潮』に「ジルマルシェックス編」との記載がある。

### 3. その後の演奏活動 —御前演奏と15の演奏会—

ジル＝マルシェックスは、帝国ホテルの演奏会シリーズを終えると、東京だけでなく横浜、京都、大阪、神戸を訪れ、各地で演奏会を行った。

12月23日付*The Japan Advertiser*は「多くの私的なコンサートを除いて少なくとも18回以上の演奏会を催した」と報告している。今回の調査で明らかになった演奏会は22公演である（表1）

ここでは、既に先行研究で明らかにされている14の演奏会<sup>20</sup>を除いた8公演について、新聞記事の調査をもとにまとめていきたい。

#### (1) 女子学習院における御前演奏

11月14日付京都日出新聞は、女子学習院の創立記念祝賀会に関する記事を載せている。11月13日女子学習院に「皇后陛下が東伏見宮妃殿下、賀賜宮妃、東久邇宮妃、竹田宮妃、李王世子妃各殿下並びに一木宮相、松浦院長以下職員、学生幼児等の奉迎を受けさせられ御入場…講堂に臨御フランス人ジルマルチックス氏のピアノ演奏を御聴取」された。アンリ・ジル＝マルシェックスがこの祝賀会に参加することになった経緯は定かではないが、閑院宮殿下が足を運ばれた11日の演奏会における成功がその一因であると考えられる<sup>21</sup>。御前演奏を行ったことは彼の成果の一つとされ、12月23日付*The Japan Advertiser*や1926年1月23日付*des débats*、2月15日付*Paris-Midi*が「アンリ・ジル＝マルシェックスはこれまでどんな優秀な外国人芸術家でさえ許されなかった御前演奏を初めて成し遂げた演奏家である」と紹介した。

#### (2) 日本青年会館における演奏会

11月18日付讀賣新聞は、「日本青年館が主催となりジル氏演奏を民衆的に聴かせる爲めに二十二日午後二時から外苑日本青年館で演奏會を催ふし、氏が今迄演奏した中で評判のよかつたものゝみをやる」という一文を載せた。同じく、20日付都新聞にも宣伝が載せられた。

#### (3) オリエンタルホテルにおける演奏会

11月28日付*The Japan Times*は、25日に行われた演奏会の報告と12月3日のオリエンタルホテルにおける演奏会の宣伝を載せた。この記事によりプログラムも明らかになっている。（表2）

表1 アンリ・ジル＝マルシェックスの演奏活動

10月3日 来日	11月25日 関西学院ホール（神戸）
10月10日 帝国ホテル(1)	12月1日 大阪中之島中央公會堂
10月11日 帝国ホテル(2)	12月2日 大阪中之島中央公會堂
10月17日 帝国ホテル(3)	12月3日 オリエンタルホテル(神戸)
10月24日 帝国ホテル(4)	12月4日 岡崎市公会堂（京都）
10月25日 帝国ホテル(5)	12月8日 送別宴
11月1日 帝国ホテル(6)	12月12日 帝国ホテル(慈善演奏会)
11月7日 日佛會館	12月13日 帝国ホテル
11月11日 丸の内日本工業倶楽部	12月14日 横浜高等工業学校講堂
11月13日 女子学習院(御前演奏)	12月15日 日本青年會館
11月21日 上野音楽学校講堂	12月22日 報知講堂
11月22日 日本青年會館	12月23日 退京

表2 オリエンタルホテルにおける演奏プログラム

ベートーヴェン	ソナタ 第32番 作品111
シューマン	謝肉祭
ファリヤ	粉屋の踊り 三角帽子より
アルベニス	やしの木陰 セギディーリャ スペインの歌作品232より
ラヴェル	亡き王女のためのパヴァーヌ
バルトーク	アレグロ・バルバロ
ドビュッシー	塔、グラナダの夕べ、雨の庭 版画より
リスト	海の上を歩くパオラの聖フランチェスコ 伝説S. 175より

20 小林茂（2005）による。また、同（2010）には、11月22日と12月14日の演奏会が加えて報告されたが、詳細は明らかにされていない。また、「14日は、帰国の船に乗るための横浜に移動して、その横浜で、出発前の最後の演奏会を開いた」という記述は誤りであると考えてよい。

21 日仏會館報告書に「日本工業倶楽部ニ演奏会ヲ催ホシタルニ、閑院宮殿下ハ姫宮殿下御同列ニテ御台臨ノ榮ヲ賜ハリ」という一文が載せられている。

(4) 薩摩邸における演奏会

『音楽評論』No.4「ジル・マルシェックス氏の送別宴『近代音楽の夜の記』」によると「神田駿河臺の薩摩邸内のヴィラ・モン・カプリス」で「静かな送別の小集」が催され、「来客は、薩摩氏の知人に限られたので男女合はせて十八九人」であり、ジル＝マルシェックスが「コンサートの緊張した儀式ばつた態度ではなく、譜を見ながら落ち寛いだ様子」でエラルのピアノを演奏した。曲目は「ストラヴィンスキイの、1925年6月に作曲されたといふ、ごく新しいソナタ<sup>22</sup>や、ダリウスミローやドビュッシー、ケラツクのソナタなど」であった。

(5) 帝国ホテル（12日）における演奏会

『音楽新潮』15巻1号は、「東京女学館新築後援会同窓白菊會主催、薩摩治郎八後援」の演奏会を紹介している<sup>23</sup>。

この記事により、当日演奏された三部構成のプログラムも明らかになっている。（表3）

表3 帝国ホテル(12日)における演奏プログラム

第1部	18世紀の音楽	第2部	19世紀の音楽	第3部	20世紀の音楽
リュリ	バサカイユ	ロッシーニ	船歌（原文のまま）	ドビュッシー	雪の上の足跡
ラモー	ミュゼットとタンブラン	ショパン	ワルツ2つ（原文のまま）		ミンストレル
	ソローニュの馬鹿者		エチュード2つ(原文のまま)		亜麻色の髪の乙女
ダカン	かつこう		子守歌		雨の庭
クーブラン	ドードー或いはゆりかごの愛	リスト	ラ・カンパネラ	ミヨー	ブラジルの郷愁
クーブラン	ひるがえるバヴォレ			ストラヴィン	ピアノ・ラグ・ミュージック
スカルラッポ	ジーク			ブーランク	3つの無窮動
モーツァルト	トルコ行進曲			ラヴェル	フォクストロット

(6) 横浜高等工業学校講堂における演奏会

12月12日付横浜毎朝新報は、演奏会についての短い宣伝を載せ、14日付横浜貿易新報は顔写真を含む詳しい記事を掲載した。この記事により、プログラムも明らかになっている。（表4）

表4 横浜高等工業学校講堂における演奏プログラム

ベートーヴェン	ソナタ 作品27 月光
ショパン	子守唄 作品57, ワルツ 作品64-2, 英雄ポロネーズ
シューマン	謝肉祭
ラモー	ミュゼットとタンブラン
ダカン	かつこう
ドビュッシー	沈める寺, 雨の庭
ラヴェル	亡き王女のためのパヴァーヌ
リスト	ハンガリー狂詩曲 第2番

(7) 日本青年会館における演奏会

12月15日付讀賣新聞が「オンガク」の記事の欄に、「ジルマルシェツクス氏演奏会は今夕六時から外苑青年會館」という一文を載せている。

(8) 報知講堂における演奏会

12月19日付東京朝日新聞が短い宣伝を載せ、24日付The Japan Advertiserが演奏会の詳細を報告している。それには、「アンリ・ジル＝マルシェックスは日本とのお別れと音楽愛好家の温かい受け入れへの感謝としてコンサートを企画し、無料で特別な招待もなく行われたので、会場には人が溢れ、遅れてきた者は立ち席でさえ入ることが出来なかった。当日は3部構成で演奏され、第1

22 1924年に作曲されたソナタと推測される。

23 12月4日付The Japan Advertiserは、12日と13日に行われる帝国ホテルでの演奏会の宣伝を載せた。それによると、12日の演奏会は、「麻布高木町で新しい学校を作る計画がある東京女学館のための慈善演奏会」であったことがわかる。また小林茂は、薩摩治郎八の二人の妹が東京女学館を卒業していることに触れ、「妹二人のため母校が校舎新築をするに当たっての同窓会後援事業に協力して、収益の提供を行った」(2010)と記している。

部ではフランクのプレリュード、コラールとフーガ、ショパンのプレリュード作品28―15「雨だれ」、ワルツ2曲、軍隊ポロネーズ、第2部ではドビュッシーの作品で構成されたプログラム、そして第3部では、ラモー、ダッカン、モーツァルト、ラヴェル、リスト、アルベニス、サンサーンスの作品が披露され…聴衆から大喝采を受けた」と記されている。

#### 4. アンリ・ジル＝マルシェックスによって与えられたもの ―演奏と語られた言葉―

これまで述べてきたように、ジル＝マルシェックスは日本滞在中22回の演奏会を行った。ここでは、当時の資料を読み解き、彼の演奏が実際にどのように受け入れられたのかを明らかにするとともに、彼自身の言葉によって伝えられた彼の芸術観、フランス音楽界の現状と日本の音楽界への提言をまとめていきたい。

##### (1) 演奏

ジル＝マルシェックスの演奏について、当時の新聞に批評を載せたのは、増澤健美、小松耕輔、平田義宗の3人であり、彼らの演奏批評を読み解くと一つの共通点が浮かび上がってくる。それは、プログラム構成だけでなく作品解釈や演奏方法においても、彼がこれまで来日した演奏家とは一線を画していると評価されたことである。

ジル＝マルシェックスを「先進的ピアニスト」と称した増澤は、彼は「バッハ、モーツァルト、ベートーベンを驚くべき個性的解釈を以て演奏」する上、「デビュッシーを中心とする印象派、ラベル、ルツセルの作品の完全なる解釈者であり、又ストラビンスキーその他急進派の作品の卓越せる演奏家である。」と評価し、「氏はこれ等の音楽の真精神を知り、その探究的な頭脳と藝術的情感とに依つて最も現代的な夫々の特徴ある音の世界を形成する。…赤い血のみなぎった現代音楽―特に現代フランス音楽を完全なる現代香気を持つて我樂界に與へた最初のピアニストである。」と述べ、「驚くべき音響の詩人」と名付けた小松は、「彼れのピアノ演奏は、いはゆる普通よびなされてゐるピアニストのそれではない。彼れのピアノを通して自己の秘密を語らうとする詩人である。…表現の鋭さと、明快性とは、たしかに仏蘭西人のもつ、著しき特徴である。彼れは決して情熱におぼれない。明晰な智力が絶えずそれを重視してゐる。そして楽曲の全体を冷静に見通してゐる。」と述べている。また二人よりも幾分冷静に批評している平田も「ベートーヴェンの最後のソナタ。…僕にはブゾーニのが脳に染込んでいて、どうも彼に比肩し得るとは思はれないがホフマンよりも数倍力もあり、熱もあり、またデリケートなフランス人らしい解釈で演奏した點は敬服する。ショパンのプレリュードとエチュード。是等は餘程自信のあるものらしく見受けられた。氏獨特の個性は遺憾なく、大胆に演奏された。…ドイツ人の弾くドイツ曲、フランス人の弾くフランス曲、これは各民族性の発露であつて決して他民族の侵し得ない領域を各自に持つてゐる」と記している。

これらの記述から、ジル＝マルシェックスは近現代の作品はもちろん、古典派やロマン派の作品をも新しい解釈によって演奏し、日本の音楽界へ提示したことがわかる。また、その解釈による音楽の世界を表現するための奏法として、小松が「彼れの技巧のうちでも、我々の最も感服するのは、タッチとペダリングである。彼れが鍵盤に触れるまでのあの一瞬時の呼吸、そして音になつて

現はれた刹那の感情。我々はたしかに一種の歓喜の戦慄を禁じ得ない。…彼れのペダリングとタッチングの巧妙さは、その音響に無限の変化と驚くべき多様の色彩と陰影とを與へる。」と述べた。これは、ジル＝マルシェックスの論文を翻訳した小松ならではの分析といえるだろう。

さらに、『音楽新潮』No.4には、ジル＝マルシェックスと同じ時期に来日したレヴィツキ (Mischa Levitzki 1898-1941)<sup>24</sup>との対比が13人の音楽関係者によって記されており、大変興味深い。その中で小泉治と大田黒元雄によって、レヴィツキは「テクニックの名人」「洗練された技巧を持つ嫌みのないピアニスト」であるのに対し、ジル・マルシェックスは「心の名人」「ピアニスト中の稀に見るピアニスト」と称された。

## (2) 語られた言葉

ジル＝マルシェックスは、日本滞在中インタビューや取材に応じ、新聞や雑誌に言葉を記している。その中で、彼は演奏家の姿勢として「譜面に現はされてゐる記號を、たゞ音に再現しようとのみかゝつてゐるのではないのです。私はその作品中から自己を発見しようと力めます。そして自己を掴み出し得たならば、ピアノの上にその自己を擴充して行きます。』<sup>25</sup>と述べた。これは、音符それぞれを正確に演奏するというよりも音がつくりだす音楽の世界をどのように表現するかに重きをおくという自身の芸術観の表れであり、日本の音楽界が受けた印象、例えば「色彩感」や「陰影」そして「音楽の心髄」というイメージに結び付いたと考えられる。

加えて、彼は身をもって体感していた当時のフランス音楽の傾向についても語っている。「シューマン、シューベルトの時代に於いては旋律が主となつてゐて、それに對する和聲は従のもののだといふ傾がありました。そしてその形式は…表面的に複雑なものであつて全体としては平面的のものです。けれど現代の新運動を見ますと、表面的にみるならば単純です。けれど一度中に入りつてゐつたならば實に複雑した感情が盛られてゐます。既に旋律とその和聲との間に主従の關係はありません。…過去の音楽は平面的でした。現代のは立體的です。その立體的のものゝの中に一つの流れを見出さうとしてゐるのです。』<sup>26</sup>そして、この言葉を聞いた鹽入龜輔は、「成程と思つた。美術の主流は既に後期印象派となつてゐる。未来派、立體派、表現派、数々の新運動が起つて来て、或ひは後期印象派に代わつて主潮となるかもしれないと云ふ有様である。それがなぜ音楽のみ、過去のロマンティズムを脱してはならないのであらうか」<sup>27</sup>と述べ、「既にジルマルシェックス氏の語つたパリーの樂況は印象派impressionismにまで進んでゐることを見せてゐる。此れが本當だ。』<sup>28</sup>と衝撃を受けている。

また、ジル＝マルシェックスはこれからの西洋音楽の動向として「嘗てはドイツ音楽の影響をうけてゐました。現代はニグロ音楽の影響をうけてゐます。が近き将来は日本の影響をうけるであらうと見てゐます。』<sup>29</sup>と述べて、日本音楽の重要性を挙げた。さらに「元来日本樂は全然メロディー

24 大正14年11月26日～30日まで帝国劇場において5夜に亘る演奏会を行っている。プログラムは秋山龍英『日本の音楽百年史』第一法規出版、1966年を参照。

25 鹽入龜輔「ジル・マルシェックス氏と語る」『月刊楽譜』月刊楽譜発行所、1925年11月

26 同上

27 同上

28 同上

29 同上



トリズムだけで出来てゐます、そしてハーモニックな處はその中に無いやうです」<sup>30</sup>と分析したうえで、最近ストラヴィンスキーが「日本樂のメロディックな處を取入れてゐる」<sup>31</sup>ことを紹介し、日本の音楽家に「欧州の音楽のハーモニーを取り入れよ」<sup>32</sup>と助言している。

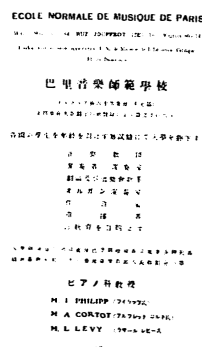
## 5. 日本の音楽界へ与えた影響 —フランス留学への道標と作曲界への働き—

これまで論じてきたとおり、ジル＝マルシェックスの音楽活動は、当時の日本の音楽界に対して大きな衝撃を与えた。ここでは、彼が日本を去った後の記事や日本の音楽界に起こった動きに注目し、ジル＝マルシェックスが日本の音楽界へ与えた影響を考察したい。

### (1) フランス留学への道標

ジル＝マルシェックスの帝国ホテルにおける演奏会プログラムには、エコール・ノルマル音楽院の宣伝記事が載せられた。これには「各國の学生を年齢を問はず無試験にて入学を許す」との一文とピアノ科教授として「M.I.PHILIPP M.A.CORTOT M.L.REVY」の名前が記され、「入學御希望の向は直接巴里同校宛或は東京市神田區駿河臺鈴木町二十一番地薩摩治郎八宛御照介の事」と案内が載せられている。(写真)

写真 プログラムに載せられた広告



この記事がどれほどの音楽家（を目指した若者）の関心を集めたのかはわからないが、実際にエコール・ノルマル音楽院への繋がりが日本において提示されたということはこれまでになく、注目すべきことである。

また、ジル＝マルシェックスの離日後、1926年2月15日付*Paris-Midi*は「ジル＝マルシェックスがクーラン、ラモーからドビュッシー、ラヴェルに至るまで私たちの代表的な芸術家たちを知らせ、親しみを持たせたという点で、日本に一種の音楽の革命を引き起こしたことは確かだ。この発見によって驚嘆させられた東京の若い人々はフランスに音楽を学びに行くことを決めた。」と報じている。実際に、原智恵子（1914-2001）と宅孝二（1904-1983）<sup>33</sup>は、パリでアンリ・ジル＝マルシェックスにピアノを教わった。

なかでも、当時天才少女と呼ばれた原智恵子の留学は、1926年1月24日付東京朝日新聞に「天才ピアニスト少女 遙々佛國へ ジルマル・シエツク氏に発見された千枝子〔ママ〕さん音楽修行の旅に」と大きく採り上げられた。彼女は、教育熱心な父とともに日本滞在中のジル＝マルシェックスの前で演奏を披露し、ジル＝マルシェックスは「この子はきつともっと伸びるはずだ…もし留学させる気があるのならパリに住む自分の家を訪ねてくるように」<sup>34</sup>と声をかけ、1927年ジル＝マルシェックスの元へと旅立つことになったのである。

30 「静かなる聴衆 私の藝術が判るのか—佛國ピアニストの疑ひ」時事新報1925年10月15日付

31 同上

32 同上

33 細川周平・片山杜秀監修『日本の作曲家—近現代音楽人名事典』日外アソシエーツ株式会社、2008年、397頁

34 石川康子『原智恵子 伝説のピアニスト』ベスト新書、2001年、20頁

## (2) 作曲界への働き

ジル＝マルシェックスの演奏を聴いたときは10代、20代であり、その後日本の音楽界で活躍した作曲家たちの音楽活動からは、ジル＝マルシェックスによる影響を発見することが出来る。

「そのときにそうとうな刺激を、われわれの年代の作曲家は受けた」<sup>35</sup>と述べた松平頼則（1907-2001）は、慶応義塾大学在学中にこの演奏会を聴き、その後、大学を中退して本格的に作曲家の道を進むことになった。さらに、松平はジル＝マルシェックスが2度目の来日中であった1931年4月に第1回ピアノリサイタルを開いて、ドビュッシー、ラヴェル、サティ、オネゲル、プーランクの作品、そして最後に自作曲を演奏するというプログラムを披露している<sup>36</sup>。

それに加え、ジル＝マルシェックスによって演奏されたフランス音楽を聴いて、「これまで自分が探し求めてゐたのはこんな音楽ではなかったろうか…それまで聴いていたドイツ音楽の重苦しさから解放されてこんなにも明るい自由な音楽があるのかと知った」<sup>37</sup> 石田一郎（1909-1990）<sup>38</sup> や「大いに感激した。…フランクの人となり音楽辞典で知り、それからフランス音楽を見直すようになり、ドビュッシーやフォーレに入つていつた。」<sup>39</sup> と述べた清瀬保二（1900-1981）も、彼の演奏によって感銘を受けたことが、その後の音楽活動に対して大きな影響を与えたと言えるのではないだろうか。

## 6. 終わりに

今回の調査において、アンリ・ジル＝マルシェックスは約3ヶ月の日本滞在中、帝国ホテルでの演奏会を始め22回の演奏会を行い、総数137曲を披露したことが明らかになった。その異常な演奏活動自体が一人の演奏家の成し遂げた偉業であるが、これを当時ドイツ音楽が主流であった日本の音楽界における出来事として捉えたとき、さらにその重要性が増す。彼が披露したバロック期から始まる音楽史を網羅したプログラムは、その構成によって偏重のない西洋音楽の歴史を語り、彼のもつ音楽観や新しい奏法による演奏はバロック、ロマン派の作品の新たな魅力を伝え、近現代の作品への興味を抱かせた。また、彼が肌で感じていたフランス音楽界の当時の現状と日本の音楽界に対する今後の期待を言葉にして語ったことは、演奏に加え日本の音楽界に対して衝撃を与えたといえる。さらに、彼の来日は、後年日本の音楽界で活躍することになる日本人音楽家のフランス留学への道を切り拓いたきっかけとなり、彼の音楽活動は、後に日本の作曲界を牽引する存在になる青年たちに力を与えたことが明らかになった。

アンリ・ジル＝マルシェックスは、1925年の来日後も6年ごとに計4回日本を訪れ、変化していく日本の音楽界を体感した、他に例のない西洋音楽家である。アンリ・ジル＝マルシェックスと日本の音楽界、両者にとって第1回目1925年の彼の日本滞在はその始まりであり、この成功が31

35 松平頼則、湯浅譲二「対談 素材は乗り越える」『音楽芸術』1969年6月、30頁

36 松平頼則はその後ジル＝マルシェックスのレッスンを受け、「ドビュッシーのプレリュードの演奏方法（ジル＝マルシェックス氏に據る）」『音楽新潮』1932年3月、4月を記している。

37 石田一郎「オー・クレピュスキュル」『音楽新潮』第12巻第1号、音楽新潮発行所、1935年、88頁

38 細川周平・片山杜秀監修『日本の作曲家—近現代音楽人名事典』日外アソシエーツ株式会社、2008年には、「ジル＝マルシェックスの音楽界を観て作曲を志す」との記載がある。

39 増澤健美、中島健蔵、清水脩、平島正郎、吉田秀和「日本作曲界の歩み」『音楽芸術』1956年8月、70頁

年、37年の来日へと結びつくこととなる。今後、彼の成し遂げた業績を掘り起こすべく、研究を続けていきたい。

本研究にあたり、井上さつき先生、沼辺信一氏に資料をご提供いただき、  
財団法人日東学術振興財団より研究助成をいただきました。  
心からお礼申し上げます。

アンリ・ジル＝マルシェックスの音楽活動に関する雑誌記事(1925年5月～1926年1月)

年月	雑誌名	巻号	題名	著者
1925年5月	音楽新潮	2(5)	挿絵 佛国大洋琴家ヂルマルシェックス	
			九月来朝する佛国大洋琴家ヂル・マルシェックスの紹介	薩摩治郎八
1925年6月	音楽新潮	2(6)	ジル・マルシェックスのこと	大田黒元雄
1925年7月	音楽新潮	2(7)	ジルマルシェックスの日本に於ける演奏曲目	主 幹 (柿沼太郎)
1925年8月	音楽新潮	2(8)	ラヴェルのピアノ技巧について	ジルマルシェックス 小松耕輔訳
1925年9月	音楽新潮	2(9)	ラヴェルのピアノ技巧について(下)	ジルマルシェックス 小松耕輔訳
			ジルマルシェックス演奏曲目中の近代作品について	大田黒元雄
1925年9月	音楽と蓄音機	12(9)	佛國洋琴家アンリーヂルマルシエツクス氏の来朝と大音楽會	
			佛國洋琴家アンリーヂルマルシエツクス	
1925年10月	音楽新潮	2(10)	ジルマルシェックス氏を迎ふ	主 幹 (柿沼太郎)
1925年10月	月刊楽譜	14(10)	口絵 今秋来朝する仏蘭西のピアニスト、ジル・マルシェックス	
1925年11月	音楽評論	No.3	表紙	
			写真の人 ジル・マルシエツクス氏	伊庭生
1925年11月	月刊楽譜	14(11)	ジル・マルシェックス氏と語る	鹽入亀輔
1925年12月	月刊楽譜	14(12)	今年度楽界の回顧	門馬直衛
1926年1月	音楽評論	No.4	レヴィツキとジルマルシェックスとを対比して	近衛秀麿 野村光一 小泉治 鈴木賢之進 大田黒元雄 堀内敬三 門馬直衛 弘田龍太郎 柿沼太郎 高折宮次 増澤健美 牛山充 小松耕輔
			ジル・マルシェックス氏の送別宴 「近代音楽の夜」記	伊庭生
1926年1月	月刊楽譜	15(1)	年頭偶感	堀内敬三

## アンリ・ジル＝マルシェツクスの音楽活動に関する新聞記事(1925年3月～1925年12月)

年月	新聞名	見出し	著者
3月9日	東京朝日新聞	佛國洋琴家の鬼才来朝す	
	讀賣新聞	フランスから青年洋琴家 ギルマルシェツクス氏が夫人をつれて今秋来朝	
3月17日	The Japan Times	M.GIL-MARCHEX, FRENCH PIANIST, WILL VISIT TOKYO	
3月20日	報知新聞	日本に紹介される生きた藝術品 来朝するデ氏夫人はフランスの美人	
9月8日	東京朝日新聞	いよいよ来朝する佛一流のピアニスト ギルマルシェツクス氏来月 初旬入京	
10月2日	東京日日新聞	樂壇風聞	
10月4日	讀賣新聞	オンガク 佛國洋琴家デ氏来朝	
	東京朝日新聞	佛ピアニスト入京 ギルマル・シェツクス氏	
	The Japan Times	Noted French Pianist Here	
10月9日	東京朝日新聞	プログラムくらべ デ氏の神技をはじめ珍しい鳥居維子さんの獨奏	野村光一
	The Japan Times	Gil-Marchex, French Pianist, in First Concert Tomorrow	
	The Japan Advertiser	Six Recitals By HENRI GIL-MARCHEX (広告)	
10月11日	東京日日新聞	樂壇風聞	
	都新聞	ピアノ名手 デ氏の演奏 昨夜ホテルで	
		音楽だより デ氏第二回演奏會	
10月12日	The Japan Times	Henri Gil-Marchex Scores Success In Premier Concert	
10月13日	東京日日新聞	ジルマルシェツクスはいふ	本人談
10月14日	東京朝日新聞	ジルマルシェツクスを聴く(上)	増澤健美
	東京日日新聞	音楽評 驚くべき音響の詩人 ギルマルシェツクス(1)	小松耕輔
10月15日	讀賣新聞	デ・マルシェツクス氏のピアノ演奏を聴く	平田義宗
	東京朝日新聞	ジルマルシェツクスを聴く(下)	増澤健美
	東京日日新聞	音楽評 驚くべき音響の詩人 ギルマルシェツクス(2)	小松耕輔
	時事新報	静かなる聴衆 私の藝術が判るのか—佛國ピアニストの疑ひ	本人談
	The Japan Times	Six Recitals By HENRI GIL-MARCHEX (広告)	
10月16日	東京日日新聞	音楽評 驚くべき音響の詩人 ギルマルシェツクス(3)	小松耕輔
	The Japan Advertiser	Six Recitals By HENRI GIL-MARCHEX (広告)	
10月22日	讀賣新聞	オンガク デル氏洋琴演奏會	
10月23日	都新聞	音楽だより ギルマルシェツクス氏獨奏會	
	The Japan Times	Tomorrow's Events	
		Six Recitals By HENRI GIL-MARCHEX (広告)	
	The Japan Advertiser	FOURTH RECITAL BY GIL-MARCHEX	
10月27日	東京日日新聞	樂界その折々 ギルマルシェツクス	
11月3日	東京朝日新聞	先進的ピアニスト デル・マルシェツクス氏(上)	増澤健美
11月4日	東京朝日新聞	先進的ピアニスト デル・マルシェツクス氏(下)	増澤健美
11月10日	讀賣新聞	オンガク フランス音楽の夕	
11月11日	The Japan Times	Today's Events	
11月12日	The Japan Advertiser	MR.HENRI GIL-MARCHEX GIVES FAREWELL CONCERT	
11月14日	京都日出新聞	女子學習院 創立記念祝賀會 學藝餘興に打興ぜらる	
11月17日	東京朝日新聞	學藝だより デル・マルシェツクス氏ピアノ大演奏會	
11月18日	讀賣新聞	オンガク デル氏洋琴演奏會二演奏會	
11月20日	都新聞	音楽だより ギルマルシェツクス氏演奏會	
11月23日	The Japan Times	Henri Gil-Marchex, French Pianist, in Pleasing Recital	
11月28日	The Japan Times	M Henri Gil-Marchex, French Pianist, Delights Kobe	
11月29日	大阪毎日新聞	佛國ピアニスト ジ氏演奏 十二月一二両日中央公會堂で	
11月30日	大阪時事新報	創立した大阪音楽協會 その主催音楽會	
12月2日	大阪毎日新聞	音楽の精髓をいかに発揮 デ氏の演奏會	
	大阪朝日新聞	名ピアニスト デル氏演奏會	
12月3日	京都日出新聞	マ氏の演奏會 4日夕市公会堂で	
	大阪時事新報	ピアノを前のデルマン シェツクス氏	
12月4日	The Japan Advertiser	FRENCH PIANIST PLANS TO GIVE RETURN CONCERT	
12月8日	The Japan Advertiser	HENRI GIL-MARCHEX Will Give His Farewell Piano Recital	
12月10日	讀賣新聞	オンガク ギルマルシェツクス氏送別ピアノ演奏會	
12月11日	東京朝日新聞	今年の樂壇(2)	柿沼太郎
	The Japan Advertiser	Many Musical Concerts Here This Week-end	
12月12日	横濱毎朝新報	佛國洋琴家 大演奏會 十四日高工で	
12月14日	横濱貿易新報	大ピアニスト ギルマルシェツクス氏 演奏會 十四日夜高工講堂	
12月15日	讀賣新聞	ジルマルシェツクス氏の演奏會は今夕六時から	
12月19日	東京朝日新聞	學藝だより デル・マルシェツクス氏無料獨奏會	
12月23日	The Japan Advertiser	Gil-Marchex Presents Piano Recital in Farewell to Tokyo	